

洗足学園音楽大学 フレッシュマン・ウインド・アンサンブル 演奏会

2022年12月2日(金)開演 18:30 (開場 18:00)

洗足学園 前田ホール

主催：洗足学園音楽大学・大学院



Greeting

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。皆さまのお力添えのおかげで無事にこの日を迎えることができましたことを、心より感謝申し上げます。

フレッシュマン・ウインド・アンサンブルは、一年生同士のアンサンブルをすることにより、連帯感や向上心を高め合いながら、アンサンブル能力の育成、合奏における音楽理解を深めることを目標に努力してまいりました。

本日のプログラムは、吹奏楽の名曲といわれるオリジナル作品からアレンジ作品まで、非常に奥が深い作品ばかりをとりあげ挑戦してまいります。そして、客演指揮者には川本貢司先生をお迎えし、常に真剣に音楽を愛し、一音を追求する思いを持ちながら勉強を重ねてまいりました。

日頃の成果を発揮し、この度の挑戦が皆さまの胸に残りますよう、感謝の気持ちを込めて演奏いたします。

どうぞ最後まで、ごゆっくりと鑑賞をお楽しみください。

フレッシュマン・ウインド・アンサンブル 企画運営責任者
瀬尾 宗利

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。

・大声や対面での会話はお控えください。

・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。

・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。

・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。

・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。

・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

Program

真島 俊夫／吹奏楽のための交響詩「波の見える風景」(改訂新版)

Toshio Mashima(1949-2016)//View with a Glimpse of Waves (Revised Edition)

G.ホルスト／吹奏楽のための第1組曲 変ホ長調 Op.28 No.1

Gustav Holst (1874-1934)//First Suite in E flat for Military Band, Op.28 No.1

第1楽章 シャコンヌ Chaconne

第2楽章 間奏曲 Intermezzo

第3楽章 行進曲 March

A.リード／アルメニアン・ダンス パート1

Alfred Reed(1921-2005)//Armenian Dances Part 1 for Concert Band or Wind Ensemble

Intermission

保科 洋／風紋(原点版)

Hiroshi Hoshina (B.1936)//Fu-mon Original Version Symhponic Band

ウィリアム・H・ヒル／セント・アンソニー・ヴァリエーションズ

William H.Hill (1930-2000)//Saint Anthony Variations

O.レスピーギ(鈴木 英史編曲)／交響詩「ローマの松」

John Barnes Ottorino Respighi(1879-1936) arr.by Eiji Suzuki

//Symphonic Poem "The Pines Rome"

第1楽章 ボルゲーゼ荘の松 The Pines of the Villa Borghese

第2楽章 カタコンブ付近の松 Pines Near a Catacomb

第3楽章 ジャニコロの松 The Pines of the Janiculum

第4楽章 アッピア街道の松 The Pines of the Appian Way

演奏

洗足学園音楽大学

フレッシュマン・ウインド・アンサンブル

指揮

川本 貢司

Profile

指揮 / 川本 貢司 Koji Kawamoto



©Ayane Shindo

- ・ 第10回東京国際音楽コンクール指揮部門 第3位（22歳）
- ・ 第59回「プラハの春」国際コンクール指揮部門第3位
- ・ 2001年～2007年 フォアポンメルン歌劇場第一専属指揮者
北東ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者
- ・ 2008年～2014年 ピルゼン放送交響楽団（チェコ）音楽監督
- ・ 2021年～ 西安交響楽団名誉客演指揮者

島根県生まれ。東京芸術大学音楽学部指揮科を卒業。在学中に指揮法を若杉弘、小田野宏之、遠藤雅古、フランシス・トラヴィス、マスタークラスにおいてヴァレリー・ゲルギエフ、セルジュ・チェリビダッケの各氏に師事。また、渡米後にミシガン大学名誉教授であるグスタフ・マイヤー氏の下で研鑽を積む。そして、生涯の師と仰ぐシャルル・デュトワ氏からは世界各地で直々に薫陶を授かり「音の魔術師」の神髄を会得する。

第10回東京国際音楽コンクール指揮部門に22歳で入賞。第59回「プラハの春」国際音楽コンクール指揮部門において第3位を獲得。

1995年、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団を指揮してデビューを飾る。その後、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、札幌交響楽団、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団等、各地のオーケストラと共演を重ねる。

2001年より活動の拠点をドイツに移し、国際的な指揮活動を展開。ドイツ・フォアポンメルン歌劇場第一専属指揮者、北東ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者、ピルゼン放送交響楽団音楽監督を歴任。2021年に西安交響楽団名誉客演指揮者に就任。

これまでにスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団、プラハ放送交響楽団など東欧の名門オーケストラを筆頭に、チューリッゲン・フィルハーモニー管弦楽団、ヴェルツブルク・マインフランク歌劇場、スロヴァキア放送交響楽団、オンタリオ・フィルハーモニック、クラスノヤルスク交響楽団、ウクライナ国立ドニプロペトロフスク・フィルハーモニー管弦楽団、イスタンブール国立交響楽団、スペイン・マラガ交響楽団、チリ・コンセプション交響楽団、王立バンコク交響楽団、深圳交響楽団、西安交響楽団、青島交響楽団、貴陽交響楽団など、欧州、北米、南米、ロシア、アジアの50以上のオーケストラに客演を続け、今後も定期公演に登壇することが予定されている。

Program Note

真島 俊夫／吹奏楽のための交響詩「波の見える風景」(改訂新版)

真島俊夫は1949年に山形県鶴岡市に生まれた。彼は幼い頃からクラシック好きであり、特にオーケストラのサウンドに興味を持ち、常にミニチュアスコアを眺めていたという。後に神奈川県大学工学部を中退し、ヤマハ・バンドディレクターズ・コースに編入。そこで、和声法と作・編曲法を故、兼田敏氏に師事。全日本音楽コンクール課題曲をはじめとする数多の吹奏楽曲を作曲しているほか、2001年に東京佼成ウインド・オーケストラの委嘱で書いた《三つのジャボニスム》は、これまでにない日本を描いた曲としてアメリカやヨーロッパで好評を博し、数多く演奏された。

《吹奏楽のための交響詩「波の見える風景」》は、カワイ吹奏楽団からの依頼で1982年の秋から翌年の春にかけて作曲された《Rainbow over the sea》という曲が原曲である。しかしカワイ吹奏楽団において初演が行われなかった為、短く改訂し1985年の全日本吹奏楽コンクール課題曲として発表された。その後、1988年に改訂新版として完成した作品である。

真島俊夫自身はこの曲を大きく分けて三つのセクションからなっていると語っている。

一つ目はオーボエから始まる旋律を筆頭に一つ目の主題が何度も繰り返されるフーガ形式で曲が進むセクションだ。このセクションでは“波の見える風景”というタイトルに相応しい、海の壮大な景色や幻想的な風景を想起させることだろう。

その後、二つ目のセクションがフルートによって提起される。一つ目のセクションとは対称的に、大海原や大波、海の荒々しさを連想させる力のある旋律が提示された後に、三つ目のセクションが始まる。一つ目のセクションの主題の再現だが、それ以上に輝かしく、真島俊夫が伝えたかった波の風景が詰まっているように感じるだろう。そして、最後には岩に大波が強くぶつかるが如く輝かしさを保ったまま断ち切るように曲が終了する。

この曲は他の真島俊夫の作品と比較しても、彼の持つロマンチズムがよく反映されている曲であると言えるだろう。

『真島俊夫公式サイト』/エト社『吹奏楽曲プログラム・ノート 秋山紀夫が選んだ689曲』325～326

(チューバ 西谷 太一・横山 舞人)

G.ホルスト／吹奏楽のための第1組曲 変ホ長調 Op.28 No.1

G.ホルストは1874年、イギリス南西部グロスター州のチェルトナムに生まれた。父・アドルフはピアニストだったため、幼い頃から厳しいピアノ指導を受けた。1893年、ロンドンの王立音楽院に入学したホルストは、作曲家・スタンオードに師事しながら本格的に作曲の勉強を始める。また、副専攻としてトロンボーンを選択し、卒業後は一時期トロンボーン奏者として生計を立てていた。ホルストはオペラや歌曲・ピアノ曲なども多数作っているが、主に管弦楽曲や吹奏楽曲、弦楽合奏曲が広く知られる。

《吹奏楽のための第1組曲》は一曲を通して、主題とのかかわりの中での関連性が高く統一感のある曲になっている。アメリカの偉大な指揮者フレデリック・フェネルが「この曲を学べば、理論、対位法、形式、スコア、作曲、そして指揮が身につく」と述べているようにこの曲には色々な音楽技法が詰まっており、吹奏楽の古典的名曲である。

第1部〈シャコンヌ〉

シャコンヌは3拍子の舞曲の一種であり、ゆったりとした3拍子のモチーフが繰り返された変奏曲の形式を持つ。冒頭、低音の8小節間のモチーフを元に全15種の変奏が続く。このシャコンヌで流れたフレーズに似たものは後に他の楽章にも変化され表される。

第2部〈インテルメッツォ〉

シャコンヌの冒頭8小節のテーマが間奏曲でも第三楽章のマーチでも展開されていくのだが間奏曲は急に拍子、曲想が変わるという躍動感がありながらも軽やかなクラリネットの刻みの上でオーボエやクラリネット、ホルネットが民謡的なメロディーを奏でる疾走感ある楽章である。

第3部〈マーチ〉

木管楽器のトリルから始まり、続く快活なマーチはブリティッシュスタイルとなっている。主部は金管楽器と打楽器だけで書かれており、その後、木管楽器によるトリオに移る。ここでも、冒頭のテーマが変化し美しい歌となって現れクライマックスを迎える。最後は木管楽器と金管楽器それぞれの主題が重なり合い重厚感ある響きをとまって幕をとじる。

(ユーフォニアム 植木 未智・金山 美月)

A.リード／アルメニアン・ダンス パート1

アルフレッド・リードは、1921年、ニューヨーク市のマンハッタンに生まれた。そして彼は、20世紀後半の吹奏楽界に多大な貢献をした音楽家の1人である。

10歳からトランペットを学び、若くしてラジオの音楽番組制作や、陸軍航空軍バンドの副指揮者として、作曲、編曲を担当。また、出版社の編集、編曲者としても活躍した。

その後マイアミ大学に奉職し、音楽産業学科の発展に尽力。1981年に東京佼成ウインドオーケストラの招きにより日本に初来日し、1988年から、2004年まで洗足学園音楽大学客員教授も務め、日本との関わりも深い。

アルメニアン・ダンス パートⅠは、パートⅡと共にコンサートバンドのための組曲として演奏されることもあるが、この作品はその第1曲目にあたり、この曲には5つのアルメニア民謡が使われている。

〈あんずの木〉

1904年に採譜された曲で3つのオリジナルな歌を組み合わせた表情豊かな曲である。冒頭のファンファーレはこのアルメニアンダンスの中でとても印象的なフレーズである

〈やまうずらの歌〉

アルメニアン音楽の創始者、ゴミダスのオリジナル曲で独唱と児童合唱のために作曲された曲である。後にピアノ伴奏による独唱曲に改められたシンプルなメロディの曲でやまうずらの、歩き回る様子を描いている。

〈おーい、ぼくのナザン〉

愛するナザンという少女に対する若者の愛の歌である。この曲は8分の5拍子がとても特徴的でアルメニアンダンス・パートⅠの中でも特に特徴的な部分である。

〈アラギャズ山〉

アルメニアの山の名でこれまでの曲調と変わり、ゆったりと壮大なコラールとして奏でられる。

〈ゆけ、ゆけ〉

ゆっくりとした曲調のアラギャズ山と対照的でユーモラスな歌でスピード感に溢れた曲である。原曲題名は「GnaGna」つまりGOGO!と勢いがあるという意味だ。サクソ、オーボエ、クラリネットを中心に陽気なメロディーが奏でられ、その後金管楽器も加わり怒濤の追い込みから華やかなフィナーレを迎える。

(トロンボーン 田中 朱音・西村 優穂)

保科 洋／風紋(原点版)

保科 洋は1936年1月31日、東京に生まれ、両国高校から東京芸術大学音楽学部作曲科に入学し、1960年第29回毎日音楽コンクール管弦楽部門第一位に入賞し、広く認められるようになった。

〈風紋〉は1987年度的全日本吹奏楽コンクールの課題曲として、全日本吹奏楽連盟の委嘱により作曲したものである。課題曲史上、最も愛され演奏され続けている名曲だ。

風紋とは、通常、砂の上にできる自然の紋様のことである。だが保科によるとこの曲の題名について、「曲名の『風紋』に特別な意味はありません。強いて言えば、前半の曲想のイメージのサラサラした表情によってかもし出される紋様などのトータルした主観的印象ということでしょう」とコメントしている。(全日本吹奏楽連盟会報より)また、作曲当初のスケッチでは課題曲としては長すぎる内容であった。そのため制約時間に合わせ曲を演奏時間5分前後に短縮した。そして近年になり原典版として当初の構想通りの風紋を出している。改訂版は144小節だった作品が190小節に延長されている。

この曲はアンダンテの静かなアルペジオの導入部に続き、旋法風な主旋律がオーボエ、クラリネット、アルト・サクソフォーンで提示される。それに対してファンファーレ風のモチーフがミュートをつけたトランペット、トロンボーンで奏でられる。これらが繰り返されながらだんだんとダイナミックで雄大に曲調に変化していき、ティンパニの鋭いソロをきっかけにヴィヴァーチェの主部へと続く。主部では先ほどの主旋律とモチーフが重ねられ独特な疾走感の中展開してゆく。さまざまな起伏を経て、突然曲は静まり序奏の雰囲気回想する。しかしすぐまた盛り上がりクライマックスを迎え、短く激しいコーダで終わる。

『吹奏楽曲プログラム・ノート秋山紀夫が選んだ689曲』エト社 225～226／富樫鉄火、石本和富、樺堂力也『一音入魂! 全日本吹奏楽コンクール名曲・名演50』川出書房新社 202～205より

(オーボエ 福田 真弓・ファゴット 財津 向日葵)

ウィリアム・H・ヒル／セント・アンソニー・ヴァリエーションズ

ウィリアム・ハーバート・ヒルは、1930年にアメリカ、テキサス州パリスに生まれた。作曲を北コロラド大学で学びながらコロラドのグリーリー・フィルハーモニック・オーケストラ、第529空軍バンドに所属、1955年に修士号を取得した。その後カルフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)で博士課程を学び1972年から1982年の間、カルフォルニア州立大学ロサンゼルス校(CSULA)で教鞭をとり、同校ウインド・アンサンブルの指揮者も務めた。

この作品は、1979年にカリフォルニア州のトーマス・ダウニー高校バンドの委嘱により作曲され同バンドの指揮者ジョージ・ガードナーに献呈された。日本初演は1980年、作曲者自身がカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校ウインドアンサンブルの指揮者として来日した際に行われた。今回演奏されるものは、日本の吹奏楽コンクールの際に改変されたもので、日本でしか出版されていない。

この曲は〈聖アンソニー〉という旋律を主題にした5つの変奏から出来ている。〈聖アンソニー〉とは17世紀にヨーロッパで歌われた聖歌であり、この主題はハイドン作曲の木管五重奏《ディヴェルティメント》第二楽章にも引用されている。そして、ブラームスが『ハイドンの主題による変奏曲』で主題として取り上げたことで有名になった。

〈第1変奏〉

冒頭は現代的な響きのリズムカルな部分をともなった序奏の後、途中テンポを落としてフルート、クラリネット、オーボエ、によって聖アンソニーのメロディーが美しく現れる。そして、冒頭部のメロディが再現され、第1変奏がしめくられる。

〈第2変奏〉

木管楽器を中心として展開される。その中でアルト・サクソフォンのソロが浮かび上がり、木管の旋律と絡み合い、叙情的な味わいのある部分である。

〈第3変奏〉

クラリネット、アルト・サクソフォン、トランペットにより激しく演奏される主題の一部の先導で始まり、その後高音楽器、低音楽器が追いかけるように演奏するフーガ部分である。

〈第4変奏〉

ティンパニやスネア、シンバルなど打楽器中心による迫力のあるアンサンブルで華やかに展開される。その後、トランペットによる高らかなファンファーレが華々しく開始されると、再び聖アンソニーのコラールが全体の響きとなり幕をとじる。

(フルート 大里 花奈・横田 望)

O.レスピーギ(鈴木 英史編曲)／交響詩「ローマの松」

オットリーノ・レスピーギ(Ottorino Respighi, 1879年7月9日 - 1936年4月18日)は、イタリアの作曲家・音楽学者・指揮者。ボローニャ出身、音楽一家に生まれ、父から、ヴァイオリンとピアノの手ほどきを受け、1891年に、ボローニャの高等音楽学校に入る。1924～26年、ローマ三部作(ローマの噴水、ローマの松、ローマの祭り)の1つである「ローマの松」を完成させ、作曲に専念した。

その後、欧州各国、南米北米へ演奏旅行をし、ピアニストとしても活躍。教会旋律、グレゴリオ旋律を研究し、イタリアの過去の器楽曲を古風なスタイルで取り入れ、オペラが主流のイタリアで、器楽作品の分野で活躍した。

《ローマの松》は、1924年に書き上げられた、ローマ三部作の中の第二作目である。ローマの風景を特徴づける樹木に松がある。この曲ではその著名な4種類の松を扱って、松が見てきたローマの往時を幻想的に回想する。

第1部〈ボルゲーゼ荘の松〉

ボルゲーゼ荘(16世紀に作られた名園)の松の木立ちの中で子どもたちが遊んでいる様子を、ローマで古くから伝わるわらべ歌である「マダマドレ」や「ジロジロトンド」をモチーフとして、高音部中心のオーケストレーションで楽しく賑やかな雰囲気表現されている。

第2部〈カタコンバ付近の松〉

カタコンバは、初期キリスト教時代に迫害の目を逃れて地下に造られた墓地であり、深い地下にホルンやと木管低音が導いていく。その深い地の底からきこえる礼拝時の聖歌がトランペットによって表現されている。

第3部〈ジャニコロの松〉

ジャニコロはローマの西側にある丘であり、ローマの街を一望することができ、夕焼けがとてロマンチックな場所である。ピアノのカデンツァやクラリネットのソロ等が作り出す深い静寂を思わせる幻想的な雰囲気から、月光の中に浮かび上がるジャニコロの松が描かれている。その静けさの中から、曲の最後にはナイチンゲールの鳴き声がきこえ、ハーブにより幻想的な月夜を思わせる。

第4部〈アッピア街道の松〉

アッピア街道は、ローマから南へ延びる古代ローマ軍によって建設された560kmに及ぶや軍用道路である。ティンパニやピアノ、コントラバスから始まったリズムに次々と楽器が加わり、膨大な数の軍隊の行列を想像させる。太陽の光が射す中で執政官の軍隊が聖なる街道を行進して、首都へ凱旋していく様子が表現されている。

参考文献

『管弦楽・協奏曲名曲名盤100』音楽之友社/『ミニチュアスコア』日本楽譜出版社/「クラシック音楽事典」戸口幸策
<http://viva.classical.music.com/post-170/>

(トランペット 柴田 海司・清田 彩華)

2022年度後期

フレッシュマン・ウインド・アンサンブル

【Concertmaster】

高木 哉太

【Flute】

赤塚 天紀	伊東 琴理	大里 花奈	越野 梨花	清水 莉穂
添田 羽音佳	津坂 和実	徳増 柚衣	長瀬 柚葉	中野 陽菜
廣田 麗	福留 弥紗	峯村 実優	横田 望	

【Oboe】

福田 真弓 上原 史織* 佐藤 千尋*

【Clarinet】

猪飼 優来	井口 一紗	今井 裕莉子	宇佐美 健斗	木村 天斗
須田 結麗乃	高木 哉太	中田 大護	福田 百々子	宮島 桃子
横尾 美帆	渡邊 優衣	山形 珠慧*		

【Bassoon】

財津 向日葵 前澤 美里* 宮原 彩*

【Saxophone】

阿部 啓康	荒木 由布子	伊藤 貫矢	上田 野亜	及川 和音
岡島 明里	草本 律音	高 泉	佐藤 あおい	佐藤 歩希
佐藤 さく良	佐藤 美櫻	佐藤 優有	島田 彩花	清水 綾乃
清水 くるみ	谢 志标	庄司 凧沙	碓石 七海	田中 碧人
中山 心永	原田 遥人	本郷 晴葵	松田 優希	山口 森太郎
山本 律希	山脇 柚葉			

【Horn】

大久保 晴夏	加藤 壮一郎	河田 陽菜	菊地 航太	櫻間 月菜
塩入 楓果	西口 麗奈	服部 和奏	横山 柊祐	

【Trumpet】

及川 優羽	齊木 龍玖	柴田 海司	鈴木 洸太	清田 彩華
鳥潟 涼花	服部 沙良	平野 光沙	細井 咲良	堀野 大典
松澤 優羽	山口 華奈子	吉田 伎良	依田 彩貴子	

【Trombone】

岩尾 琴羽	加茂 伸一	小松崎 東空	神野 日向	鈴木 夏佳
田中 朱音	鱸居 愛加	中尾 慧	中西 優和	西村 優穂
東野 健志	山下 里奈	湯原 芽生		

*=演奏補助要員

【Euphonium】

植木 未智 金山 美月 外川 真結子 山崎 尊子

【Tuba】

西 咲良 西谷 太一 山本 大雅 横山 舞人

【Contrabass】

高野 響花* 本田 直也*

【Percussion】

井川 のの	榎本 若葉	老沼 咲桜	落合 侑亮	加藤 龍雅
阪本 真唯	櫻井 優風	佐々木 和奏	島崎 蓮	高田 勇大
田中 翔乃	中本 亜美	畑津 圭吾	林 恭輔	原 佑安
平野 芽生	福島 潤	吉田 歩登	吉田 葉音	梁 深
両倉 愛斗				

【Piano】

松尾 沙衣★

【Celesta】

渡邊 穂乃佳★

【Organ】

原田 真侑*

【Harp】

斎藤 樹里*

★=賛助 * =演奏補助要員

企画運営責任者 瀬尾 宗利

バンドトレーナー 穴倉 晃

指導教員

秋田 孝訓	有馬 理絵	飯島 泉	石井 喜久子	泉 真由	岩黒 綾乃
大貫 比佐志	小川 佳津子	貝沼 拓実	勝俣 秦	菅 貴登	田中 拓也
田村 真寛	次田 心平	當仲 絵理	中田 小弥香	中村 めぐみ	中山 隆崇
野本 洋介	林 辰則	久永 重明	福田 昌範	前田 綾子	宮村 和宏
目等 貴士	渡部 亨				

助手 八木澤 知里

アカデミックコーディネーター 岩岡 一志